Title	Enfin, Malherbe vint...
Sub Title	
Author	大久保, 洋(Okubo, Hiromi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.333- 336
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0333

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Enfin, Malherbe vint...

大久保洋

Enfin, Malherbe vint...

これは Brunetière がかの Manuel の中で引用しているボワローの一句であるが、この句は私の頭の中で、何十年となく、朔さんと結びついて離れない。

× × ×

私と朔さんとのつき合い?.....それは、もう、かれこれ四十年近くなる。

はじめは、アテネ・フランスの待合室だったと思う。関東大震災後、三崎町河岸にできた木造の、お粗末な校舎の、いつも薄暗い部屋であった。

そこには、短いマントをきて落着かない中原中也や、よれよれの着流しに籐のステッキをついた坂口安吾らの姿が

あった。早稲田の制服で、いつも思いつめたような、新庄嘉章の顔もあった。待合室は、常にそれらの連中を中心に賑やかであったが、学生服の朔さんは、たいてい片隅の机で、独り本に読み耽っていた。

その時、私は予科の三年、朔さんは本科の一年だったと思う。アテネでもクラスがちがって、そう会うことはなかったが、当時のアテネには、今のきだ・みのるのギリシャ語があり、大村雄治のラテン語があって、私もちょっと出ていたから、そのいづれかで一諸だったような気もする。

一年後、私も朔さんの後を追って本科に進んだ。そして、そのはじめての授業が、後藤先生の仏文学史、テキストが今言う Brunetière の Manuel de l'Histoire de la

littérature française であった。

教室は、一年から三年まで一諸で、出ている学生の数は、全部で十人にもならなかった。

部厚なテキストは、もう百頁ばかり進んでいた。

「佐藤君……」

と後藤先生の声がかかった。

前の方の席にいた朔さんの早口の朗読、そしてその区切りがこの *Enfin, Malherbe vint?*... であった。

どうしてこの場面が、後まで強く私の印象に残ったのだろう。しかもこれは、ある午後の授業で、背後からさしこむ陽の光りまで、ありありと目に浮ぶからふしぎだ。

「遂にマレルブは来れり、か……」と訳し終えた朔さんの若々しい声が、私の耳の底にまだ余韻を残している。

おそらく何びとも、こうした古い断片的な記憶を、いくらかはもっているであろう。いくつかの言葉、いくつかの文章について、これはいつ、どこで、どんな状況の中で覚えたかを、人々は明確に言うことができる。この教室の記

憶もその一つの例にすぎない。

ところで、この *Enfin, Malherbe vint...* であるが、Brunetière はこの句を引用しながら、フランス国文学成立の過程におけるマレルブの役割を、ボワローと反対の立場で述べている。しかし、それはそれとして、いま私が、私の古い記憶の引出しから、この句をここに持出したのは他でもない。この句にひっかけて、過去に於てわれわれの仏文科はなかなか一つの形を成さなかった、朔さんが出てはじめてちゃんとしたものになった。つまりは、*Enfin Sakusan vint* と言はしてもらいたかったからである。

私達の頃の仏文は、今の言葉でいえばムード的で、大方はディレクタントの集りであった。いやなもの敬遠し、すきなものだけに打込む風があった。その中で朔さんは、何にでもとりついて、広く読み且つ分析していた。そして彼が卒業し、学校に残った頃は、事フランス文学に関する限り、何をきかれても彼は、知らないといったためしない、という評判をとっていた。実に、あの重厚な頭脳

は、une cervelle d'or であると思はれた。

その頃、広瀬哲士教授の主唱で、「仏蘭西文学其他」という雑誌を出すことになった。その名の示す通り、内容は文学だけでなく、演劇、音楽、絵画全般に及んだので、この編集の上で朔さんの *cervelle d'or* が果した役割は大きかった。朔さんはまた、当時のヌーベル・ヴァグ「詩と詩論」にも関係し、「せるばん」の寄稿者でもあって、その時既に J・P・サルトルを同誌上で紹介した事が最近わかり、人々を驚かせたばかりである。

私と朔さんとの個人的関係は、朔さんが、昭和十五、六年頃、健康を害して学校を休み、私とその留守中日吉に出講した時から一層深くなった。鎌倉山に転地して、療養一途に過ぎたが、一時はどうなることかと案じられた。

しかし、その闘病生活の中でも、朔さんは地味な研究生活をつづけていた。丁度私は、週末いつも鶴沼に行ったので、時々鎌倉山を訪れることができた。物もなく、灯りも不自由な中で、シュペルヴィエルの話をきいた事など、な

つかしい思い出である。

また、終戦後の混乱期、まだフランスの本もろくに入ってこなかった時分、たまたまフランス大使館に関係があった私は、アレキサンドリアで出ていた抗戦派の文学雑誌を手に入れ、さっそくそれを朔さんに持参した事がある。

それは、エチアンブルが編集しているものであった。「エチアンブルとは妙な名だね」

と私が言う

「シュルレアリストで、前から名前がある人だよ」

といいながら、朔さんはその名をなつかしげに眺めていた。

これは、先頃、日本に来て、塾でも講演したあのエチアンブルだが、日本で、戦争前からその名を知っていた人が、朔さん以外に、何人いた事であろうか。

× × ×

現在の朔さんに、終戦前後のあの病弱な影は微塵も見られない。病気から立直っただけでなく、益々健康で、以前

は控え目だった酒も相当行けるようになり、飲んで乱れず、つき合いもよい。

この朔さんが、今度還暦だという。同じ時代を数十年、つかず離れず共に過してきた私の感慨はまことに深く、文字通り先輩であり畏友である朔さんの健康を心から祝福してやまない。

佐藤先生と私

私が文学部の予科へはいったころ、三田通りの福島屋書店に、「仏蘭西文学その他」という雑誌が置いてあった。

これは、塾のフランス文学科の先生と学生が執筆している月刊誌で、新しい作家の作品と評論の紹介が多く、われわれ新入生にとっては新鮮な魅力があった。内容についての記憶はもう薄れているが、ただ、最も活躍していたのが

いま、慶応の仏文といえば、各大学を通じて最も異彩ある存在の一つとなった。朔さんが育てた若い人達のすぐれた業績もさることながら、そのきっかけは朔さんがつくったのだということを、いつまでも忘れまい。

最後にも一度、思い出の一句を云はして貰う。

Enfin, Malherbe vint...

二 宮 孝 顯

佐藤朔さんであるという印象は忘れられない。朔さんもペン・ネームであったが、そのほかにも別名を使ってたくさんの記事を書いていられるのが、なんとなしにわれわれにもわかった。

仏文科へはいつて早くこの雑誌に書かせてもらいたいと念願していたが、私が本科へ進んだ時には、どういふ事情